

# 明治期与謝野晶子における自己認識の変容

小嶋翔

## 一、はじめに

与謝野晶子（一八七八—一九四三）は、明治期の浪漫主義を代表するとされる歌人である。特に、その第一歌集『みだれ髪』（一九〇一）が、「伝統的」かつ「封建的」な旧社会秩序に対して人間の自由な精神を歌い上げたものという評価を受けたことから、晶子の評価は、北村透谷や島崎藤村などのように「近代的自我」を早期に獲得し、表現した人物であるとされたことが多かった。

しかし、「近代化」というベクトルを前提にした單線的歴史理解が成り立たなくなつた今日において、以上のように

な晶子理解は十分なものとは言えない。確かに、『みだれ髪』が一般的な意味で「自由な精神」<sup>〔3〕</sup>を表現した歌集であるという評価は間違いではなく、また、その『みだれ髪』が同時代から今日に至るまで読む者に強い衝撃を与える歌集であったことも事実である。しかしそのあまり、晶子の評価は「近代的」な「自由な精神」の獲得者であるという段階で硬直しているきらいがある。こうした晶子評価の硬化は、『みだれ髪』以後の晶子論を困難にしてしまつてゐる感が否めない。特に女性史の研究においては、一九八〇年代以降の「被害者史観」から「加害者史観」への「パラダイム・チェンジ」<sup>〔4〕</sup>のもと、晶子も他の女性知識人の例に漏れず、第二次大戦期の時局迎合的と見なされがちな発

言が否定的に論じられるようになった。しかし、そのような議論においても、結局は「伝統的」な家父長制度の中で生きていた人間であったのだというよう、晶子の評価は依然として「近代的」か否かという枠組みの中にある。

以上のような研究史から、主に二つの問題点が指摘できるよう。一つは上述した『みだれ髪』中心主義による「近代化」論の陥穀、もう一つは『みだれ髪』と第二次大戦期での発言に対する関心の高さから、その間の晶子の思想を動態的に捉えようとする研究が見られないことである。

こうした研究史の問題点を踏まえると、鈴木貞美氏による「大正生命主義」と晶子の関係についての言及はきわめて重要である。鈴木氏は、明治後半に登場する所謂「煩悶青年」と晶子を比較し、晶子は「我」とは〈踊れる肉〉にすぎない」と平然と言いつつしまえる「強い自我」の持ち主であるとして、「煩悶青年」らとは一線を画した存在であったことを指摘する。一般に「煩悶」と言えば、日清・日露両戦争を経て維新以来の課題であつた国家の対外的独立が実現した日本において、立身出世といった従来の価値観に満足し得ない青年たちが抱いた「人生いかに生きるべきか」という懷疑を指すものである。そうした「煩悶青年」たちは、「自我を人類や宇宙などの普遍性に開き、個の生存競争を超える」とする方向へとその思想を転換

させていった。この時、自他の区別を溶解して個人の孤独を解消する媒介となつたのが、「自我」の内奥にあつて個人を超える「普遍性」を有するとされた「生命」である。明治末から大正における「煩悶青年」たちの「生命」探求は、特に「大正生命主義」として理解されている。

しかし、こうした「生命」探求の思想は、近代においては北村透谷の「内部生命論」（一八九三）等を嚆矢とする、理想と現実の葛藤を形而上的に止揚する思想の系譜の中で理解されることが多い。したがつて、鈴木氏が指摘するように、晶子の思想が「煩悶青年」らと一線を画したものではあるならば、透谷と晶子との間においても何らかの思想的差異があることが予想されよう。ここにおいて、透谷と晶子を「近代的」や「浪漫主義」という概念で同列に扱うことをへの疑問が生じるのである。

以上のような問題関心から、本稿は以下のように論を進めたい。まず、晶子に対する浪漫主義者という評価を一度括弧に入れ、「みだれ髪」以前まで遡つて晶子と透谷との思想的差異を明らかにする。その後、明治末年に生じた晶子の「煩悶」が克服される過程に注目することで、これまで「浪漫主義者」として画一的に評価されてきた晶子の思想を動態的に把握し、さらにこれを当時の女性知識人として晶子と双璧を為す平塚らいで（一八八六—一九七一）と

比較検討する。らいでうは後の母性保護論争などで晶子の好敵手となる存在であり、何より自我の内奥に個を越える「普遍性」を探求していたという意味で、同時代の思想傾向を代表する知識人でもあつた。こうしたらいでうとの比較を通して、最終的に晶子を同時代の思想史に位置付けること本稿の目的とする。

## 二、『みだれ髪』における自己認識

晶子の詩歌が初めて世に出たのは一八九五（明治二八）年、晶子が一七歳の時のことである。やがて一八九八（明治三二）年に、関西地方の文学青年らによる結社・浪華青年文学会の支社が晶子の郷里である堺に作られると、晶子もその機関誌『よしあし草』に作品を発表するようになつた。堺支社の発起人となつたのは、河井醉茗、河野鉄南らである。後に晶子の夫となる与謝野寛との頻繁な書簡のやりとりなどから、彼らのこうした動きは、この頃の寛が行つていた和歌革新運動と呼応するものであつたことは明らかである。そのため、一九〇〇（明治三三）年に寛率いる文学結社・新詩社が『明星』の刊行を開始すると、狭い関西の歌壇では満足できない『よしあし草』同人の多くが上京するようになつた。

この頃の晶子は、右の醉茗や鉄南から歌の指導を受けていた。先輩同人の多くが上京する道を選ぶ中、晶子は一九〇〇年二月の鉄南に宛てた書簡で、「あなた様近々東の方へ入らせらるゝとは誠ニや いたるところに青山ありの御男子さま扱も扱も御うらやましき」と記している。鉄南に上京した経歴はなく、この書簡自体は晶子の誤解によるものであるが、何れにせよ、同人たちの上京は晶子にとって「うらやましき」ものであった。

晶子の志を妨げたものは、女性が積極的に外に出て文学活動をすることに理解を示さなかつた家庭環境である。そうした晶子の家族に対する不満の聞き役になつっていたのが鉄南であつた。晶子は鉄南に宛て「ホームの波風をもらせきいてやらむの御ことはうれしくぞんじ参候 かゝばひとひろ二ひろにて事つく得べくもあらず 語らばとてひと日二日に申つくすべくもなく候<sup>(1)</sup>」と記し、実際、この頃の晶子は月に幾度も鉄南に手紙を書いている。

晶子の文学に対する志を育てたのは、幼少時から親しんでいた源氏物語などの古典文学もさることながら、十三、四歳から読んでいたという『文学界』などの文芸雑誌であった<sup>(2)</sup>。晶子が『文学界』を手に取つた時期と、透谷が『文学界』に文章を寄せていた時期とは重なり合う。晶子は鉄南に「エセルソンの樂天論をよミてもこをやくせし桃<sup>(3)</sup>

谷の身のはてを思へば何をよめばとてきけばとて人々天の定めし運命にははむこふべくもあらずといよいよこの世

うとましくぞんじ候<sup>(13)</sup>と書き送つてゐる。「エセルソンの樂天論」とは、一八九四（明治二七）年に民友社から刊行された透谷の『エマルソン』を指す。晶子が「樂天論」を採ることを妨げる「天の定めし運命」とは、言うまでもなく上述した「ホームの波風」であつた。「わがホームの波風はあわのなるとも波風はなしとばかりに候ま、私にらく天など、とても思ひも及ばぬ事に候<sup>(14)</sup>」と晶子は鉄南に訴えている。

ここで問題なのは、透谷から晶子への思想継承の過程で、どのような読み換えが行われていたかである。晶子が読んだ透谷の『エマルソン』は、一九世紀アメリカの哲学者ラルフ・ヴォルドー・エマソンを紹介したものである。透谷によれば、エマソンの思想で重要なのは「自然と人間の調和」である。

自然と人間の調和、是れ「自然」より受くる悦楽の本源なり。人は自然に背いて栄ふること能はず。自然の中には大なる理法の存するあり。その理法は、「自然」の上にも、人間の上にも同じく臨めり。「自然」の悦楽を得んとせば、先づ能く「自然」を知らざるべからず、且つ又た自然を支配せる同じ理法の下に順隸せざ

るべからず、斯くの如くして而して後、人は自然の友たり、自然との調和者たり。<sup>(15)</sup>

「自然との調和」を果たすためには、「自然を支配せる同じ理法」を理解し、これに「順隸」しなければならない。では、その「理法」とは何処にあるのか。

彼「——エマソン」の尤も重んずるところは心靈なり、彼は全宇宙を分ちて自然と心靈との二とせり、而して自然是終に心靈の為めに成立てるものなるを説かずんば止まさるなり、宇宙は心靈の前に透明無色なるものにして、爰に心靈あり、爰に純理あり、此の心靈は唯一の存在者にして、此の純理は唯一の支配者なるを説かずんば止まさるなり。我の裡に我あり、我の外にも我あり、而しで凡ての者は我の裡なる我の為に存し、之を除きては一も成全をなせるものあるなし。輪転無常は争ふ可からざる宇宙の定法なり、然れども其の中にありて、必らず毀はれざる、必らず滅せざるものあることを彼は信ぜり。<sup>(16)</sup>

「唯一の支配者」たる「理法」は、「自然」の上にも、人間の上にも同じく臨む普遍性を有するものである。したがつて、自我の奥深くまで沈潜し「我の裡なる我」に到達することによつて、かえつて個人の狭い自我は克服され、「宇宙の」普遍性へと解放された人間は「自然との調和者」

となることができる。かかる「我の裡」の奥深くに存在し、個人を越えて「自然」と連続する普遍的実在は「内部の生命」とも呼ばれた。<sup>17)</sup>

この『エマルソン』の記述からは、透谷の「内部生命論」（一八九三）や「人生に相渉るとは何の謂ぞ」（同）の議論が想起されよう。透谷にとつて「純文学」とは、表層的な意味での自己を表現するものではなく、自己の内奥まで深く沈潜し、自他の境界を解消する「宇宙の精神即ち神」「内部の生命」を「インスピレーション」<sup>19)</sup>するものなのである。

さて、透谷はかかる自分の思想をエマソンに仮託して語り、これを「楽天主義」と評したのであるが、晶子が自分には「思ひも及ばぬ事」だとした「楽天主義」は、必ずしも透谷が語ろうとした意味を有していない。透谷が「インスピレーション」するような自他融合の境地などは、晶子にとつては「ホームの波風」という「運命」によつて望むべくもなく、この現実世界は「うとまし」く忌避するものでしかない。結局は自死を選んだ「桃谷の身のはてを思へば」それはなぞらのことである。では、晶子にとつての文学とは如何なるものなのか。

晩年の晶子は、若年期の自分を回顧して「島崎」藤村氏の模倣に過ぎなかつた<sup>20)</sup>と語つてゐる。藤村は『文学界

で透谷とともに活躍し、特にその第一詩集『若菜集』（一八九七）は明治浪漫主義を代表する作品とされている。そこで、透谷から晶子への影響関係を、両者の間に藤村を挟んだ形で考察してみよう。佐藤伸宏氏は藤村について、「想世界」と「実世界」の対立、葛藤の狭間にあつて、その「争闘」の裡に身を置くことを詩人としての自己に課した透谷に対し、藤村はその一切を捨象して「今日こゝ」を歌つた詩人であると評し、「藤村には形而上学がない」という蒲原有明の藤村評を「本質を確実に射抜いて」いると指摘する。<sup>21)</sup>藤村が「今日こゝ」に存在する自己を表現するとすれば、それは透谷のような「実世界」と「想世界」<sup>22)</sup>との狭間で両者の対立を解消し、かつ止揚するような「我の裡なる我」という「形而上」的探求ではなく、形而下において現実として存在する「我」に他ならない。藤村においては、透谷的な自他融合の志向は断念され、「想世界」が「今日こゝ」の自分が存在する「実世界」からは手の届かない彼岸として対置されてしまう。次の詩は『若菜集』に収められた「おくめ」という作品である。

こひしきまゝに家を出て／こゝの岸よりかの岸へ／越えましものと来て見れば／千鳥鳴くなり夕まぐれ　こひには親も捨てはて／やむよしもなき胸の火や／鬢の毛を吹く河風よ／せめてあはれと思へかし<sup>23)</sup>

透谷は「恋愛」を「想世界と実世界との争戦より想世界の敗将をして立籠らしむる牙城」<sup>(24)</sup>であるとしたが、それはあくまで「牙城」なのであって、そこには「想世界と実世界との争戦」を続けようとする透谷の意志が存在する。しかし、藤村が描く「恋愛」は、「こここの岸よりかの岸へ」というように、「家」「親」という此岸に対置された手の届かない彼岸に想定されるものであった。

議論を晶子に戻そう。藤村が「おくめ」に歌つたような、現実と理想が此岸と彼岸として対置される構図は、まさに晶子が置かれていた境遇に対応するものであった。実際に晶子は鉄南に宛てた書翰の中で「わが身はけふわかな集のおきくにわらはるゝのに候べし」と記している。「おきく」とは『若菜集』に収められた詩の一つで、同名の女性が「をこ」のかたる／ことのはを／まこと、おもふ／ことな  
かれ<sup>(25)</sup>と歌う作品である。この頃の晶子は、自分の恋愛感情を藤村の詩の言葉を用いて語っていた。

そして一九〇〇年八月、晶子は来阪した与謝野寛と運命的な出会いを果たす。寛と恋愛関係に至った晶子は、翌一九〇一（明治三四）年六月に、実家を出奔同然に飛び出し、寛のいる東京へと向かった。後の一九〇七（明治四〇）年に、晶子は出奔前夜を振り返つて「親の家」と題した次の詩を詠んでいる。

……ふた親いますわが家を／捨てむとすなる前の宵／しづかに更くる刻刻の／時計の音ぞ凍りたる。

番頭と父母と／茶ばなしするを安しと見、／こなたの隣にわが影は、／親を捨つると恋すると／繁き思をする我を／あはれと歎き涙しぬ。

「親を捨つると恋すると」という葛藤が、藤村の「おくめ」と全く重なり合う構図であることは明らかである。晶子は藤村的な此岸と彼岸の構図のもとに自身の上京を捉えているが、ここで重要なのは、藤村が彼岸とした「恋」の世界に晶子が実際に渡つてしまつたという事実である。生家のある堺を離れ、寛のいる東京へ向かうという物理的移動は、晶子からすれば、此岸（「家」）から彼岸（「こひ」）へと渡る行為のアナロジーとして認識し得るであろう。

透谷の文学観が、「我の裡なる我」に存在して全宇宙に通底する普遍性を志向するものであつたのに対し、晶子のそれは悪しき現実と理想との止揚不能な絶対的乖離を前提にしていた。それは、晶子がおかれていた境遇そのものであるとともに、形而下において「今日こゝ」の自己を表現する藤村から継承した構図である。そして、晶子が藤村と異なるのは、「家」「親」という此岸の現実を切り捨て、藤村が彼岸とした世界にわが身を移したことである。上京

後の晶子にとって、「今日こゝ」に存在する自分は同時に理想の彼岸の存在なのである。晶子の上京は、形而下において「今日こゝ」に存在する自分をそのまま理想と化してしまうという力強い嘗為であり、晶子にとって文学とは、かかる現実にして理想である自己をそのままに表現すれば事足りるものであつた。寛との恋愛を奔放に歌い上げた『みだれ髪』が世に出たのは、上京からわずか二ヶ月後の一九〇一年八月である。『みだれ髪』がナルシズムに充ちた作品だとされる所以は、以上のような現実の自分を即理想たらしめんとする晶子の志向によるのである。時に晶子、二三歳であった。

### 三、明治末年の「煩悶」とその克服

#### ——「過程」としての自己

前節に述べたような、「今日こゝ」にある自分をしてそのまま彼岸の理想を体現させようとする晶子の志向は、やがて明治末年の晶子を「煩悶」へと陥れることになつた。第一節でも述べたように、「煩悶青年」らにおける「生命」探求は、近代においては透谷の「内部生命論」等に遡ることができると、晶子には透谷のような形而上における普遍性を探求する志向が希薄であったことは既に指摘した通りである。しかし、それでいて明治末年の晶子は、自分が抱

いた葛藤をまさに「煩悶」として認識し、これを克服しようと努めている。では、晶子において「煩悶」とは何であつたのか。

晶子が文学活動の拠点とした『明星』は、浪漫主義文学に代わって自然主義文学が台頭する明治末年の文芸思潮の中で、次第に売り上げ部数を落としていった。その結果、新詩社は著しい経営難に陥り、さらにそれは新詩社を運営する与謝野家に経済的困窮をもたらした。この頃の晶子は『明星』を代表する歌人として、また寛の妻として、さらには三男三女の母として、家計のために多量な文筆活動をこなすことを強いられていた。次の資料は一九一〇（明治四三）年十一月に書かれた「雨の半日」の一節である。

自分は此四五年筆を執ることに計り急がしい。その自分で書いた物すら碌碌に読返す暇も無い。「文学とはこんな物では無かつた筈だが」と思ふことも屢々である。……

自分に暇が無いのは身体に暇が無いのである。自分の書いてゐる物は半分は労働に過ぎない。まだ心には沢山の余裕がある。其のがなさけなくてならぬ。少し落着いて自分に適した「心」の仕事をしようと思ふと、直ぐ後から後からと心にもない浅はかな書き物に追ひ掛けられ妨げられる。……子供に対する親の義務を感じ

すればこそ自分は心にも無い書き物に急がしい日送りをするのである。子供があるので自分の足は地の上へ

釘付けられ、幾百億の凡人が過去に見、現在に見てゐる平俗な世間を自分も見るのである。自分の目に由つて初めて見つけだす世界のある事を知つてゐながら、

其方へ目を放つ暇がないのである。<sup>(23)</sup>

家族の扶養責任を一身に背負つた晶子が見たものは、彼岸の理想へと到達したはずの自分に生じた新たな現実であつた。理想的体現者である自己を率直に表現する晶子の「心」の仕事は、今や家族を扶養するための单なる「労働」に「追い掛けられ妨げられ」るようになつてしまつた。そして、詳しく述べるが、晶子はこうした葛藤をまさに「煩悶」として認識していたのである。

しかし、晶子はこのような憂いの中でも悲嘆に暮れていたわけではなかつた。晶子は同時期に記した「雑記帳」の中で、次のようにも語つてゐる。

自分は又、人生を否定し悲觀し我身を見窄らしい物のみすぼくと自暴自棄する消極的思想の行れるのを賤民的傾向として軽蔑してゐる。人生を苦痛の連続と見、無意味の努力と見るのも哲学上根拠のある説ですけれど、其苦痛に打勝つて怡樂を得よう、少しでも有意味の生活を建てようとするのも人間本有の欲求である以上、能

ふ丈我身を自愛自重する積極的态度で進むのが賢い仕方であり、其れが古來の天才偉人の道である。<sup>(24)</sup>

仮に晶子が生活難の中で悲嘆に暮れるばかりだとすれば、それは他でもない晶子自身が「輕蔑」する所である。ここで晶子が、現実に喘ぐ自分を「幾百億の凡人」に擬え、また自分を叱咤する晶子が「天才偉人の道」を自身に課していることに注目したい。彼岸の理想へと到達し、「天才偉人の道」を歩んでいたかに見えた晶子は、「<sup>(25)</sup>幾百億の凡人」の群れの中へといつしか転落していったのである。

かかる事態において晶子が採るべき道は、自分を彼岸の理想にふさわしい「天才偉人の道」へと再度引き上げるかもしくは「天才偉人」とは異なる新たな自己認識を獲得するかの何れかであろう。そして、結論から言えば、晶子は後者の道を選ぶことになる。

晶子が「煩悶」を克服していく過程を考える上で、ここではまず一九一三（大正二）年に書かれた晶子の自伝的小説「明るみへ」の次の1節に注目したい。「明るみへ」は『明星』の廃刊（一九〇八）から夫・寛の渡欧（一九一二）までの晶子の心理的変化を綴つた作品である。『明星』が廃刊の已む無きに至つたことに落胆を隠せない寛を、晶子は西洋留学へと送り出した。寛は一九一一（明治四四）年十一月に渡航し、晶子は一九〇一年の上京以来、はじめて寛

の長期不在を経験することになるが、この一九一一年とは、晶子が「心」の仕事」が出来ないと嘆いたその翌年であつた。旅立つ夫の見送りを終えた後、独り自宅へと帰ってきたときの心境を、晶子は「明るみへ」の中で次のように回想している。

私は何んだか急に自分の命のぐらつき出したのを感じます。これは良人の居なくなつた家へ帰つて来た以来の新しい変化です。……それがもう恋の世界ではないかも知れませんが、私を新しく包んだ空気は瑠璃色をして居ます。……曾て恋をし始めた日に作つた自分の世界の蜜のやうな空気に何時しか浸り過ぎて、其れが自分の命を曇らせ、低徊させ、鈍らせて、自然そこに固定するやうな傾向を私が持つやうになつて居ましたのは事実です。……一昔前に私は寂しいひとりぼっちの娘であつたればこそ、新しい果実の皮を剥くやうに、自分の純な命を開いて真剣に自分の恋を作り出すことが出来ました。私の芸術は命から連る血の飛沫でした。私が再び経験するひとりぼつちは命を前へのし出して何を新しく摑ませようとするのでせう。<sup>(2)</sup>

前の資料で晶子が「自分の目に由つて初めて見つけだす世界」と語っていたのは、この資料で言うところの「曾て恋をし始めた日に作つた自分の世界」のことであろう。し

かし、そこに「何時しか浸り過ぎ」ていたと反省した晶子は、「寂しいひとりぼっち」であつた「一昔前」の自分のように、何らかの「新し」い世界をこれから「摑」むのだと言う。この記述はあくまで自伝小説のものであり、そこにはテクスト化されることによって生じる実際との齟齬があることは否めない。しかし、自伝というテクストの性格を考えるならば、少なくとも何らかの変化を遂げたと見られたい、乃至はそう見られて構わないという晶子の意図は窺えよう。<sup>(2)</sup> 一九一三年の晶子から見て、一九一一年の晶子にはやはり何らかの転機——おそらくは寛の不在を契機とする——があつたのである。では、一九一一年の晶子には具体的にどのような思想的変化があつたのか。

「恋を作り出」した「一昔前」の「寂しいひとりぼっち」の自分に戻るということは、寛を追つて上京しようとしていた頃の自分に立ち返るということであり、それは理想的彼岸へと渡つてしまふ以前の自分を回復することだとも言えよう。彼岸の理想に到達していながら新たな現実の前に苦悩していた晶子は、まず自分の立ち位置を彼岸に置くことをやめてみたのである。そのように「明るみへ」を理解すると、晶子の「煩悶」が一九一一年に至つて克服されいく過程を見て取ることが出来る。

まず、寛が渡欧した一九一一年頃に書かれたとされる

「新婦人の手始」を参照する。この中で晶子は、平安貴族の女性を引き合いに出し、自身を含む日本女性の現状と今後について語っている。

自分の境遇を静かに反省し、境遇から余り飛び離れない発展の順序を取る思慮を欠いて、一躍その理想を実現しようとした和泉式部は謂ゆる今日の煩悶の人で、何うしても悲劇を作り出す運命を持つて居りました。<sup>33</sup>ここで晶子は和泉式部を「今日の煩悶の人」と見るが、「躍その理想を実現しようとした」和泉式部の生き方とは、まさに晶子その人のそれまでの歩みに他ならない。晶子は自分と和泉式部を「煩悶の人」として重ね合わせている。晶子は続けて次のように語る。

今日の我若い婦人は、在来の古い習慣に従はうか、新しい世の理想に従はうかと云ふ様な二つの路の分岐点に立つてゐるのでは無く、旧時代を背後にし、橋一つを隔てて向うに新時代を望む大川端まで押寄せ到来て、混雜し奔き合つてゐるのです。<sup>34</sup>

「在来の古い習慣に従はうか、新しい世の理想に従はうか」という問題は、かつて「躍その理想を実現しようとして彼岸へと渡った晶子自身が抱えていた問題であった。「在来の古い習慣」に拘泥する晶子の「ホーム」は、晶子に自由な文学活動を許さなかつたのである。<sup>35</sup>そして、理想

の彼岸へと渡つたかつての自分を一度振り出しに戻した晶子は、改めて「新しい世の理想」を彼岸に捉えた「橋」に歩を進めようとする。

ここで重要なのは、「橋」を渡らなければならないという前提もさることながら、これからその「橋」を渡るところなのだという現状認識と、その「橋」が「混雜し躊躇つてゐる」ために渡ることが著しく困難だということである。この状況では、「橋」を渡つた先のことよりも、まずは「橋」を無事に渡りきることを考えなければなるまい。

自重し警戒しながら素早く混雜こみあふ橋を渡り切らうとするには、橋詰に立つて橋の在所ありかを示して下さる眞の識者の議論に頼つても宜しいが、其れは詰り参考と致す位の事で、自分で自分に適した進路を押開く覚悟が大切です。……種々の立派な議論を参考とするにしても其中から更に自分の見識で自分の現在に適した部分を選んで用ゐねばなりません。然うでなくして一躍理想を追はうとすると、婦人は男子と異ひ社会的にも不便があり、自分の智識や感情や意志にも相当の準備が不足してゐますから、屹度家庭と衝突したり、自身にも理想と実際との矛盾に煩悶したり致す羽目に陥るでせう。其れでわたしは「自分の見識で自分の天分と境遇とに

適した路を選んで、一歩一歩、踏み締め踏み締め自分の理想に向つて躍進すること」をお奨め致したいのです。<sup>35</sup>

「躍理想を追はうと」すれば、和泉式部もそうであつたように、「理想と実際との矛盾」のために「煩悶」に陥つてしまふ。晶子はそうではなく、「自分の見識」を以て「自分の天分と境遇とに適した路を選」び、彼岸の理想へと向かう「橋」を「一步一歩、踏み締め踏み締め」て渡ろうとしていた。この頃の晶子は、彼岸の理想へ到達するという結果よりも、その到達の仕方に関心を向け始めているのである。

そして、寛渡欧後の一九一一年一〇月に発表された「偶然と直感」と題された次の感想では、晶子が箇条書きの形で自身の思想を綴つている。

天才と能才と凡人との区別の物古りて無用なるかな。  
新しき批評家は「その人、その一生に如何ばかり自己を転換して新異の生活を開拓せるや」を述べよ。<sup>36</sup>

ここには「天才偉人の道」を歩み得ぬ「凡人」としての自分に悲歎していた一九一〇年までの晶子の姿は無い。晶子は「天才」と「凡人」の区別を「無用」として捨て去つた。そして晶子は、次のような新しい自己認識を語るのである。

われは總てに過程を喜ぶ。過程の複雑にして一見混沌と見まがふ許りなるを酷賞す。結論と幕切とは概ね予期に反せずして心跳の乏しき例とす。これ結論をのみ蒐集したる教訓譚の類の青年に愛せられざる所以なるべし。過程に次ぐ過程を以てするものの最なるは人生なり。……

……わが行ふ所、筆にする所の一切には毫も明日までの自信なし、われは今日を営み、今日を記録す。之を昨日に比しなば甚だしき矛盾あらん。われは其れに就いて恥づべき理由を発見せず。寧ろさらにより甚だしき矛盾を明日以後に生ぜんことを願へり。されば我的一切は過程なり。不安と動搖とに充ちつゝ新異を追ふ所の過程なり。<sup>37</sup>

重要なのは結果（彼岸の理想に到達すること）よりも、そこにある道程のあり方（彼岸への到達の仕方）である。そして、その「過程」を「自分で自分に適した進路を押開く覚悟」で歩むこと自体が、晶子にとつては自己を表現することであつた（「我的一切は過程なり」）。与謝野晶子、といふ人間は、彼岸の理想を追つて絶えず生成変化を続ける永遠の「過程」であり、<sup>38</sup>まだ理想に到達できずに「煩悶」する「今日」の晶子も、その「過程」の一断面として肯定されるのである。

かかる思想的変化の根底には、『みだれ髪』以来の「今日こゝ」にある自分をそのまままで肯定しようとする晶子の精神性が脈々と息づいている。晶子のナルシズムは、「自分で自分に適した進路を押開く覚悟」と引き替えに、常に自己肯定を譲らない自尊心を堅持したのであつた。

#### 四、明治末年における晶子の位相

晶子が「煩悶」を克服した一九一一年という年が、日本で最初の女性だけによる文芸雑誌『青鞆』が刊行された年であることは興味深い。晶子は『青鞆』創刊者である平塚らいてうの依頼を受け、『青鞆』創刊号の巻頭に「山の動く日来る」他の詩を寄せている。

「神秘主義」と形容されるらいてうの思想に大きな影響を与えたのが参禅体験であることはよく知られている。独

我論を脱したとして、個を超える普遍性を希求していた「煩悶青年」たちに衝撃を与えた西田幾多郎の『善の研究』(やはり一九一一年)もまた西田の参禅体験によるところが多かつた。らいてうの思想が、個を超える普遍性を自己の内奥に求めようとする同時代の思想傾向の例に漏れないことは明らかであろう。(40)そこで本節では、晶子とらいてうの自己認識のあり方を比較検討することで、自己を「過程」

として認識した晶子の思想史的個性を浮き彫りにしたい。  
らいてうが『青鞆』に期待したのは、「女性のなかの潜める天才を、殊に芸術に志した女性の中なる潜める天才を発現せしむるによき機会を与える」ことであつた。らいてうは『青鞆』創刊の辞「元始女性は太陽であった——『青鞆』発刊に際して」の中で次のように語る。

私の希う真の自由解放とは何だろう。いうまでもなく潜める天才を、偉大なる潜在能力を十二分に發揮させることにほかならぬ。それには発展の妨害となるものの総てをまず取除かねばならぬ。それは外的の圧迫だろうか、はたまた智識の不足だろうか、否、それらも全くなくはあるまい。しかしその主たるものはやはり我そのもの、天才の所有者、天才の宿れる宮なる我そのものである。

我れ我を遊離する時、潜める天才は発現する。

私どもは我が内なる潜める天才のために我を犠牲にせねばならぬ。いわゆる無我にならねばならぬ。(41)  
我とは自己拡大の極致である。

かつて晶子が抱いていた「天才」像と、らいてうが言う「天才」とがまったく別の性質を持つことは明らかである。らいてうが言う「天才」とは謂わば没我の境地において発現されるものである。それは「精神集注」によつて「中層

ないし下層の我、死すべく、滅ぶべき仮現の我<sup>(4)</sup>を滅却し、得られるものであった。そして、「私は総ての女性とともに潜める天才を確信したい」<sup>(4)</sup>と語るらいてうにとつて、「天才」とは彼方に希求する理想ではなく、すべての人間に予め付与されたものである。したがつて、人間は現状において既に「天才」性を有しているのであり、後はそれを發揮しさえすればよい。

しかし、らいてうのようによく現状の自分に立ち止まり、その深奥を探求するような静的な態度は、晶子が抱いた「過程」という自己認識においてはあり得ない。「過程」が「過程」として肯定されるのは、それが理想に向かつて進歩する「過程」である場合のみである。晶子の自己認識においては、現状の自分に「天才」を見出すということはあり得ず、むしろ、より良い自分のために現状の自分を否定し続ける動的な態度こそが肯定される。

この点で晶子は、同時代の所謂「大正期教養派」の知識人に比してもその個性が認められよう。たとえば、「私の今、力を集注しなければならない所はどうしても自分自身の事ですから、大体の態度としては可成実社会との深入りした葛藤を避けなければなら」<sup>(5)</sup>ず、「私の力がもつと充ちて張つて溢れて来たら、私は十分に腰を据ゑて実社会に突

掛かつて行きたいと思つてゐ」と語る阿部次郎のような思考スタイルは、晶子からすれば余りに悠長な態度と言わざるを得ないであろう。

永遠の「過程」を生きる晶子は、常に今現在の自分を以て「実社会」と切り結ばねばならない。そして、晶子にとつての「実社会」とは、何よりもまず家族への扶養責任であり、そして「実社会」と切り結ぶ手段は詩歌を含む文筆活動であった。「煩悶」を克服した翌一九二一年（明治四五）、晶子は「此両三年」に生じた葛藤を次のように述懐し、創作活動に臨む覚悟を記している。

或人は今日の如き時代にあつては二重三重の生活をせねばならぬと云ふ。其意は仮面の生活をせよ、心ならぬ製作も衣食の為めに忍べと云ふのである。……併し自分の性情としては何うも仮面を被りにくい。心ならぬ仕事をするのが厭である。自分は此両三年この矛盾に人知れず悩んだ。

而して自分の今の心持では斯う考へて心の上の平衡を兎に角保たせて居る。其れは二重三重の生活だと考へると、<sup>(6)</sup> 慊らぬ所、安からぬ所がある。自分は何事をするにも唯だ一重の平面な生活だと考へたい。一枚の平面の上に自分は幾様の変化ある生活をして居るのだと考へたい。其れで自動的に製作する場合は勿論のこと、

他から需められて受身に成つて筆を執る時も自分の力量の許す限りを惜まずに出して、其れにも是にも相応の「我」と云ふ刻印を押して置がうと思ふ。純粹の叙事詩、それは自分の瞳の様な位置を占めて居るものであるけれども、夫れを主として世人の買ふ時代は遠い将来、自分の生きて居ない将来の事である。自分は手をも口をも足をも齊しく充実したる自分の表示だとして時の人縱覧に任す。自分の一切の述作に自分を偽つた物は一つも無いことを期する。述作のみならず、良人と棲むのも、子供を育てるのも、自分と關係を持つ一切の事は皆自分の実際生活の各範疇である。<sup>(46)</sup>

晶子においては、現状の自分が如何に不完全であつても、そこで立ち止まることは許されない。しかし、晶子が表現するものは、それがどのよう仕事であつても、永遠の「過程」を生きる晶子の現時点における「相應の「我」」の所産なのであり、絶えずより良い自己を追い求める——「過程」を全うする——ことによつて肯定できるのである。かつて晶子が『みだれ髪』に詠んだものは、理想そのものである自己であった。しかし、「煩悶」を克服した後の晶子が表現するのは、理想を追い求める永遠の「過程」としての自己である。この時、晶子は二三歳。『みだれ髪』から十年の歳月が過ぎていた。

## 五、おわりに——総括と展望

以上、『みだれ髪』以前から明治末の一九一一年までに生じた晶子の自己認識の変容と、それに伴う自己表現のあり方の変化を追つてきた。確かに晶子は、同時代に用いられた言葉を使い、然るべき知識人達の影響下にその思想を培つたが、それは晶子自身が言うように「参考と致す位の事」であつて、晶子はあくまでみずからの覺悟のもとに自分の「進路を押開」<sup>(47)</sup>き続けようとしたのである。明治期の晶子が必要としたのは「今日こゝ」にある自分をそのままに肯定し得る思想であり、それは透谷やらいでう、また「煩悶青年」のように、自他の区別、理想と現実の乖離を形而的に溶解しようとする思想とは相容れないものである。しかし、それを晶子の思想的な短絡さと見るべきではない。

『みだれ髪』における晶子は、彼岸の理想へと到達した自己を自由奔放に歌い上げたが、それは晶子の人生選択を決して許容しない「家」という此岸の現実を切り捨てる行為でもあった。『みだれ髪』の晶子は、遠く離れてしまった生家や母親を思慕する作品もまた残している。また、明治末年の「煩悶」を経た晶子が、それでもなお「今日

こ、」にある自分をそのままに肯定する思想を堅持したのは、晶子の自尊心もさることながら、みずからの文筆活動で子供を養わねばならないという責任が、晶子をして決して挫折することを許さなかつたことに多くよるのである。晶子の思想は、形而上における安易な理想と現実の止揚がそもそも許されない不退転の状況下で、常に「自分で自分に適した進路を押開く覚悟」をみずからに課すものであった。そして、自己を「過程」として再認識した晶子は、自己が永遠の「過程」であるが故に、その最期の時まで「自分で自分に適した進路を押開」き続けなければならないであろう。

大正期以降の晶子は、婦人問題への言及や教育分野への参画など、その活動を積極的に拡大していく。本稿は、大正期以降により充実していく晶子の思想的営為を論じる上での序論に過ぎない。以上に述べた成果を踏まえて、大正期以降の晶子について論じる続稿を期したい。

#### 付記 引用資料中、旧字体・異体字は新字体に適宜改めた。

資料中の傍線は筆者による。引用資料中の……は引用者による省略を、「」は引用者による注釈を示している。詩を資料として用いる場合、行変えは「」、連変えは二字分の空白で表わした。

#### 注

- (1) そのような研究としてはまず小田切秀雄『日本現代史大系 文学史』(一九六一年、東洋経済新報社)が挙げられる。また、佐竹籌彦「みだれ髪」の作者の自我形成(『国語国文』二五一三、一九五六)、近年では赤塚行雄『与謝野晶子研究』(一九九〇年、学芸書林)、中村文雄『君死にたまふこと勿れ』(一九九四年、和泉書院)、伝記的研究としては逸見久美『評伝 与謝野鉄幹晶子』(二〇〇七年、八木書店)などがある。

(2) 本間久雄「一葉と晶子——その時代的地位について」『明治大正文学研究』一九、一九五六年、等を参照。

(3) 『国文学 解釈と教材の研究』四四一四、一九九九年、与謝野晶子特集号の副題「自由な精神」に拠る。

(4) 上野千鶴子『ナショナリズムとジェンダー』一九九八年、青土社、三〇頁。

(5) 例えは、渡邊澄子氏は戦時下の晶子について、「良妻賢母主義を批判し、厳しい言葉で女性の自立を唱え、女性を物視する男を糾弾し、男女平等を呼び続けた女性解放の

オピニオンリーダーとして頂点に立っていた晶子だったが、その根は最期まで不变の良妻賢母主義のまさに核である天皇制への信奉だった」と批判している(「日本の近代戦争と作家たち——女性文学者の戦争荷担」、岡野幸江・北田幸恵・長谷川馨・渡邊澄子共編『女たちの戦争責任』二〇

(○四年、東京堂出版、一二六頁)。

(6) 鈴木貞美『生命觀の探求——重層する危機のなかで』(一〇〇七年、作品社)の第八章「大正生命主義の文芸」

第八節「与謝野晶子——踊る肉体」を参照。

(7) 同右、「大正生命主義と現代」——「大正生命主義の文芸」(一〇〇七年、作品社)の第八章「大正生命主義の文芸」(昭・原島正・三橋健編『日本思想史辞典』)二〇〇九年、山川出版社、八三〇頁等を参照。

(8) 鈴木貞美「『大正生命主義』とは何か」、鈴木貞美編『大正生命主義と現代』(一九九五年、河出書房)、一一頁。

(9) 鈴木貞美「大正生命主義研究のいま」(同右)、坂本多加雄「知識人——大正・昭和精神史断章」(一九九六年、読売新聞社)の第三章「民衆」と「政治」等を参照。

(10) 逸見久美編『与謝野寛晶子書簡集成』(一卷、二〇〇一年、八木書店)、一九頁。

(11) 同右、五二頁。

(12) 与謝野晶子「ひらきぶみ」(一九〇四年)には「私た一ばかりにて鷗外様のしがらみ草紙、星川様と申す方の何やら評論など分からずながら読みならひ、十三四にてめざまし草、文学界など買はせ居り候」とある(『定本与謝野晶子全集』十二卷、一九八一年、講談社、四六八／六九頁)。この後、同全集から引用する場合は『全集』と略して記す。

(13) 前掲『与謝野寛晶子書簡集成』一卷、二九頁。

(14) 同右、一二頁。

(15) 『明治文学全集』二九、一九七六年、筑摩書房、二五三頁。

(16) 同右、二七〇頁。

(17) 同右、一七八頁。

(18) 北村透谷「人生に相渉るとは何の謂ぞ」(一八九三年、同右、一二三頁)。

(19) 北村透谷「内部生命論」(一八九三年、同右、一四六頁)。

(20) 与謝野晶子「あとがき」『与謝野晶子歌集』(一九四三年、岩波書店)、三六一頁。

(21) 佐藤伸宏『日本近代象徴詩の研究』(一〇〇五年、翰林書房)、三七〇頁。また、紅野謙介氏も、透谷の言う「内部生命」が「内部」でありながら絶対の「外部」であり、「その「内部」にして「外部」の「生命」にふれる唯一の機会」は「瞬間の瞑契」としての「インスピレーション」であるとした上で、藤村が用いる「内部的的生命」という言葉は「インスピレーション」を欠いており、それは「その名のとおりの「内部」の「生命」であつて、「透谷に見られた「外部」としての「内部」、もはや「インスピレーション」でしかふれえない「心宮の秘奥」ではなかつたとして、透谷と藤村の間に「生命」論の読み替えがあつたことを指摘している(透谷の「生命」論の読み替えが「生命的」、前掲『大正生命主義研究と現代』(一〇〇九〇一

貢)。

- (22) 北村透谷「厭世詩家と女性」一八九一年、前掲『明治文学全集』二九、六五頁。
- (23) 島崎藤村『若菜集』一八九七年、前掲『明治文学全集』六九、七頁。
- (24) 注(22)に同じ。
- (25) 前掲『与謝野寛晶子書簡集成』一卷、四二頁。
- (26) 前掲『明治文学全集』六九、九頁。
- (27) 『全集』九卷、三三六頁。
- (28) 『全集』十四卷、四〇～四一頁。
- (29) 同右、一八〇～八一頁。
- (30) 近代における「天才」概念は、特に「創造」「独創性」「想像力」を想起させるものであり、特に一九世紀に「天才」を論じたシェリング、ショーベンハウアー、F・シュレーダー、ヘーゲルらにおいては、いずれも「天才」を芸術の領域に限定している特徴があるとされる(岩波哲学・思想辞典)一九九八年、岩波書店、一二三五頁)。晶子の「天才」「凡人」観がこのような西洋哲学の影響下にあることは容易に想像できよう。
- (31) 『全集』十一卷、二六〇～六五頁。
- (32) 日比嘉高『(自己)表象』の文学史——自分を書く小説の登場(一〇〇二年、翰林書房)は、明治四〇年代頃から多くなる「作者自身が作中に登場する(自己)表象テクス

ト』について、それらが「明治三〇年代から顯著になつた煩悶青年的な『人生問題』」(二三三頁)の所産であり、かつ「自己発展」を志す「自己」そのものが表現の対象となり、表現することが「自己発展」をさらに推進する(二六九頁)という性格を有していく、その性格は「四〇年代の青年思潮において〈自己〉は単に特權的に価値付与されるだけではなく、それを「発展」「拡充」するという発想」(二三九頁)に起因していると指摘する。本稿で述べた晶子の「煩悶」を考えれば、「明るみへ」もまた同時代における〈自己表象テクスト〉の一つであつたと言えよう。

(33) 『全集』十四卷、八二頁。

(34) 同右、八四頁。

(35) 晶子は上京以前の自分について「明治新興の芸術と、僅に翻訳を透して覗いた歐州十九世紀前半の芸術とに憧れながら、一面には家庭と郷里の保守、偽善、腐敗、無智、無趣味、陰鬱の空気に取巻かれて其れを憎悪して居た(『歌の作りやう』一九一五年、『全集』十三卷、三七～三八頁)と語っている。晶子自身が同時代の例に漏れず「近代化」という時代の課題を強く内面化しており、晶子における現実と理想という対立構図が、そのまま旧時代と新時代という構図に置き換えることは言うまでもない。

(36) 『全集』十四卷、八四～八五頁。

(37)

同右、三六〇頁。

(38)

同右、三六一頁。

(39)

かかる晶子の思想がベルグソンの影響を受けていることは明らかである。例えば、野村幸一郎氏は「与謝野晶子の批評——ベルグソンズム受容を視座として」(『京都橘女子大学研究紀要』一一六、一九九九年)において、晶子が「生命」という「普遍的価値」によつて「靈と肉の一致」を目指したとしている。しかし、鈴木貞美氏が指摘するように、晶子の思想を「靈肉一致」とすることは難しい(注(6)参照)。晶子におけるベルグソン受容には換骨奪胎が行われている可能性があり、この問題については今後検討したい。

(40)

永野基綱「朦朧たる時代——〈生命(ライフ)〉の哲学」、前掲『大正生命主義と現代』一一八頁。

(41)

『平塚らいてう著作集』一巻、一九八三年、大月書店、二七頁。

(42)

同右、一二五頁。

(43)

同右、一六頁。

(44)

同右、一五頁。

(45)

「実社会に対する我等の態度」一九一四年、『阿部次郎全集』十二卷、一九六二年、角川書店、二〇八〇九頁。

(46)

「私の文学的生活」一九二二年、『全集』十四巻、三五五、五六頁。

(47)

そうした作品に、『みだれ髪』と同年に書かれた美文「母の文」がある。この作品は母親から晶子への手紙という形式を取り、「世に二人の親子の御前様【——晶子】と我【——母】までと思ひ交して、我斯ばかりに御前様恋しく、母を母と夢に叫ぶ折々ばかり身に沁む哀はあらず候との傍の君の御文さも有らうぞ」と語るが、実際に詠み込まれているのは、遠く離れてしまった母親を思慕する晶子の姿であろう(『全集』十二巻、四三四頁)。

(東北大学大学院)